


 巻頭言

## 「植物防疫」と私

千葉大学大学院園芸学研究科准教授 **野村 まさ 史**



「昆虫にかかわる仕事に就くにはどうしたらいいのだろう…」インターネットもパソコンもない時代に高校生だった私にとって、将来の仕事については大好きな昆虫と過ごしながらかけたらなあ…といった夢物語を空想するような感覚しか持っていなかった。「昆虫園の飼育係がいいんじゃないの？」母は実家からほど近いところにある多摩動物公園の昆虫園を勧めてくれたが、そのころから購読し始めた雑誌「インセクトリウム」を読んでも、平易な文章ながら内容は高校生には難しいものが多く、昆虫にかかわる職業へ通じるような記事はなく、どうしたら飼育係になれるのか皆目見当もつかなかった。

その後、高校の先生の話や大学受験関係の書籍で、昆虫にかかわるには理学部の生物か農学部に進めばいいらしいとわかったが、当時の私には「農業の中での昆虫」というイメージが頭に描かれ、迷わず農学部に進んだのは、今から考えると運命的なものを感じる。縁あって入学した玉川大学農学部農学科の応用昆虫学研究室では、細胞質共生微生物によるテントウムシの性比異常に関する研究を行ったので、農業にかかわるものではなかったが、佐々木正己先生、新島恵子先生には昆虫学はもちろん、研究に関するコモンセンスを基礎から叩き込まれ、私の土台を作っていただいた。卒論で携わったのは基礎研究であったが、研究室に常備してあった雑誌の一つに「植物防疫」があった。植物防疫…？知らない言葉であり、何で昆虫の研究室にこの雑誌が…と思いつつ手に取ったのを覚えているが、開いてみると農業と昆虫という漠然としたイメージが具体的な像として形作られている研究紹介記事に衝撃を受けたと言っても過言ではない。研究室は当時、ミツバチや天敵類等の有用昆虫を扱っていた部屋だったので、害虫や害虫防除という分野に出会えたのは「植物防疫」誌のおかげである。

その後、東京農工大学の植物防疫学科害虫学研究室の大学院に進んだ私であったが、故一瀬太良先生から出されたテーマは、キンウワバ類の分子系統学的な研究であった。材料には害虫を含むものやはり基礎研究にかかわる内容…。しかし、あちらこちらに材料を採集しに行くのは得難い経験で、キンウワバ類の生き様を知ることができたのは、「どんな研究でも自分の実験材料の自然界での生活を知る」というこれ以降の私の研究スタイルの根幹となった。そしてここでも研究室の書棚には毎月の「植物防疫」誌があった…。以前は私にとっては難解だった研究記事も、年を経るに従ってその多くは理解で

きるようになったし、むしろ最新の研究内容を手軽に知ることができる、頼りになる雑誌となっていた。

博士課程を修了しようとしていたある日、指導教員の三橋 淳先生に呼びだされた。先生は「植物防疫」誌を片手に掲載されていた千葉大学園芸学部の公募情報を指し示し「応募したらどうか」と仰った。公募の内容と私の研究テーマが近かったこともあり、応募してみたところ、縁があったのか採用していただけることになった。当時の研究室は故真梶徳純先生はじめ本山直樹先生、天野 洋先生という大変個性豊かな人たちに囲まれたこともあって、比較的自由に研究することができた。私の研究分野は当初、分子系統学的な内容が主であったが、次第に害虫としての昆虫の生活史の研究、そして天野先生の影響を受け天敵類に関する研究に移行するようになり、とうとう私は農業分野の昆虫の研究、植物保護の研究に携わるようになった。また故野村健一先生の代から続いている新農薬実用化試験を担当する研究室だったので、毎週のように害虫を探したり放虫したり、農薬の効果判定を行っていたことがきっかけとなり、害虫防除に対する興味が呼び覚まされたのかもしれない。

こうして私は「植物防疫」によって知った研究分野に大きくかかわれるようになった。そしてこのたび、この縁の深い「植物防疫」誌に内側からかかわるようになった。私を育ててくれたこの雑誌を、今度はサポートすることができるのは大きな恩返しであると感じる。判やカラー化等大きな「変態」をすませた本誌を、次の段階として大きく成長させるべく微力ながら応援していきたいと思っている。

(「植物防疫」編集委員)

追伸：本誌 71 巻 3 号のエッセイ「草原性のホタル」で紹介させていただいた「空の星と地上の星 (ホタル) をコラボさせた写真」については紙面の関係で掲載できなかったが、何人かの読者からそれを見たいとリクエストされたので、本誌のカラー化に乗じて掲載させていただく。

